みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

災害エスノグラフィーとインタビュー

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 林, 勲男 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4389

2．災害エスノグラフィーとインタビュー

林　勲男*

2.1　はじめに

「調査などいらない。それより何を持ってきてくれたのか」。ある被災地で来訪の趣旨を説明した私に，その言葉が返ってきた。

大規模な自然災害が発生すれば，被災地に大量に集まってくるのは救援物資とボランティアを含めた支援者，そしてマスコミと研究者である。上の住民の言葉は，半ば予想していた反応であった。「住民の視点」「被災者の視点」からすれば，大学や研究機関に所属する研究者が，たとえ地元行政の紹介で，あるいは行政の担当者と共に調査目的で訪れたとしても，次から次へとやって来るマスコミの取材とそう大差はない。被災地の人びとは，繰り返されるインタビューや，アンケートの同じような質問に辟易している。

災害被災地での調査というと，ハザードの大きさや建造物の被害状況を把握するための実地調査か，被災者の生活への影響を調べるアンケート調査あるいは質問票による面接調査を思い浮かべる人が大半であろう。しかしその一方で，社会現象としての災害実態をより詳細かつ総体的に把握し，記述する方法としてのエスノグラフィーへの関心が高まっている。

エスノグラフィーを用いた災害研究には，二つの方向性がみとめられる。一つは，体験者（被災者および災害対応者）の視点から，災害の状況，本人や周囲の人びとのとった判断や行動，その相互関係などを詳細に聞き取って記録することで，災害過程の総体的理解を得ようとするもの。もう一つは，やはり体験者の視点を重視しながら，災害の直接的・間接的影響や個人・集団・組織の対応状況とその相互関係を数年あるいはそれ以上の長期にわたり詳細に調査し，災害発生以前の社会・文化状況に照らしあわせて，当該の災害そのものの理解を深めようとするものである。両者ともに，災害という非日常状況を，人びとの生活の背景となる社会構造や価値体系との関連性において捉えようとする点では共通しており，災害の多層性・複雑性を解明することで，防災力・減災力の増進に寄与するものと考えられている。

エスノグラフィー調査では，調査者が一方的に聞く側に立つのではなく，互いに影響しあう相互行為関係に，さらには対象地域の社会関係に参入し，そうした相互行為の結果として，インタビューや観察によるデータを収集していく。したがって，冒頭に紹介したような反応は，被災後間もない調査地では決して珍しいものではない。

2.2　フィールドワーク

2.2.1　人類学的フィールドワーク

社会・文化人類学（以下，人類学）では，1年あるいはそれ以上にわたって現地に住み込んでの調査を行う。多くの場合が，海外のいわゆる「異文化」での単独調査である。「住み込む」ということは，その土地の言語を習得し，社会生活に参加することが求められる。社会生活に参加しながら，観察やインタビューを主な手段として，「住民の視点から（from the native's point of view）」の物事の見方や出来事の解釈の仕方，さまざまな課題解決のプロセスを理解し，それをフィールドノートに記録していく。そのフィールワークで収

*国立民族学博物館 / 総合研究大学院大学

集したデータを，研究テーマおよび調査地域に関する先行研究などの文献資料と総合させて書き上げるのが民族誌，すなわちエスノグラフィーである。そして多くの人類学者は，研究テーマに関する現象の変化と持続性を捉えるため，あるいは新たなテーマを持って，同じ調査地でのフィールドワークを断続的に継続していく。

当然のことながら，こうした長期間に及ぶフィールドワークにはさまざまな困難が伴う。それらの問題を解決していくプロセスの中で，対象社会・文化への理解も深まっていく。とりわけフィールドワークの初期段階で重要なのは，研究という名目はあるにしても，フィールドワーカーはその社会の住民からすれば他所者の一人にすぎず，これからその地域のことを学んでいくという姿勢である。調査地では，この他所者に対して関心を持つ人もいれば，まったく持たない人もいるし，警戒心や猜疑心を持たれることも珍しくない。そして人びとの対応は，調査者との相互関係性に依存し，変化するものである。

2.2.2 量的調査と質的調査

人類学ほどの長期間に及ぶ調査は稀だとしても，研究者自身が現地に赴いてフィールドワークを行うことは，すでに社会科学のさまざまな分野で行われている。そして社会現象に関するデータ収集法は，一般に量的調査と質的調査に分けられる。量的調査とはデータを統計処理可能な形で収集するもので，十分な標本数の確保と効率化を図るためにアンケートを実施したり，直接面接の方法を採用するにしても，あらかじめ準備した質問リストに即した形での，一問一答方式が基本である。一方の質的調査は，参与観察や聞き取りによって，個人の体験やその周囲の人びととの関係，体験に関する考えや感情などについても詳細に記述していくため，短期間に効率よく大量の標本数を確保することはできない。

表2-1に示すとおり，量的調査と質的調査は，それぞれに有用性が異なるため，調査の目的によって使い分けなければならない。ただ，質的調査の訓練プログラムを確立することは難しく，経験の蓄積，調査者の資質や能力に依存する部分が大きいため，検証可能性を重視する「科学的な」方法ではないとの批判も受けやすい。確かに，収集データの質が調査者次第という「職人芸」に近い側面はあるが，それは決して否定されるべきものではなく，社会現象の性質によっては，むしろ必然的な調査方法であるし，調査者の経験や資質，能力が正確なデータを収集する必要条件であることは，量的調査のための質問用紙を作成する場合でも同様であろう。

エスノグラフィーは，量的調査を全く実施しないわけではないが，質的調査をデータ収集の中心に据え，行為者の視点に立ち，その個人が自らの体験に基づいて構築した現実（リアリティ）の多様性を，インタビューによって具体的な事例として収集し，それら相互の関係性あるいは個々の事例を成り立たせている社会構造や政治・経済的状況，さらにはそれらの歴史的経緯や価値体系などの解明と，それらに照らした具体的事例の理解をめざすものである。

表2-1 量的調査と質的調査の比較（間淵 2006）

	質的調査	量的調査
調査・分析の手法	主観的	客観的
調査・分析手続の透明性	低	高
調査可能な標本数	少量	多量
調査内容の臨機応変度	高	低
調査に必要な能力の修得方法の標準化	困難	容易
調査結果への感情移入	容易	困難
調査結果から母集団の状況を推計すること	不可能	可能

2.2.3 ラポールの形成

人類学におけるフィールドワークの先駆者であるマリノフスキーは，フィールドワークについて４つの基準ないし条件を設けた。それらは，（１）現地での長期滞在，（２）現地語の習得，（３）現地社会の一員として受け入れられること，（４）現地の人びととの間に信頼関係（ラポール）を築くこと，である(マリノフスキー　1967)。災害に関する現地調査を実施しようとする研究者のほとんどは，異文化での長期滞在型のフィールドワークは行なわないとしても，面会を重ね，個人の体験や見解について詳細に調査しようとする場合，信頼関係の形成は不可欠である。

だが，信頼関係を形成したからといって，必ずしも調査対象者の「本音」を引き出せるとはかぎらない。そもそも「本音を引き出す」と考えること自体が，体験のすべてを言語化できるとの誤った前提に立つ危険性を含んでいる。ましてや九死に一生を得，今後の生活に不安を抱いている段階の被災者が，いつ，どのような状況で自らの体験を語り出すことができるかは，かなりの個人差がある。また，確かに体験の語りには「本音」と呼べるものもあることは事実であるが，語りとは体験そのものというよりも，語り手による体験の解釈であり，語りという行為はかなり状況に依存した，流動的で変化しやすいものであることを忘れてはならないだろう。それは決して「建て前」とか「嘘」というものではなく，個人が自分の体験を語る際の特徴と認識すべきである。

長期の住み込みはせずとも，数年あるいはそれ以上の期間にわたって被災地の変化を追う目的で，断続的なフィールドワークを実施する研究者は増えているようである。そうした研究者は，当然のことながら研究成果の現地への還元が期待されるのと同時に，調査完遂の目的だけで信頼関係を築くことは難しく，信頼関係は対象地域への参加によって形成される社会関係に大きく依存することに気づくであろう。

2.3 エスノグラフィック・インタビュー

「エスノグラフィー」という言葉は，フィールドワークの結果をまとめた報告書という意味以外に，フィールドワークという調査方法やその調査の作業プロセス自体を指しても用いられる。後者の意味で用いる場合にも，「グラフィー（-graphy）」が示すように，フィールドワーク中にメモをとったりフィールドノートを整理したりと，書く行為あるいは書いたものが重要視されていることがわかる。フィールワークの方法や，エスノグラフィーを完成させる作業手順については，近年多くの書籍が出版されている（例えば，桜井，2002；佐藤，2002，2008）ので，詳細はそれらに譲るとして，ここでは私の経験に基づいてインタビュー調査について述べておきたい。

エスノグラフィーでは当事者の視点を重視するため，インタビューによって収集されるデータの重要度が高い。インタビューというと，時間と場所をあらかじめ設定した面接調査を思い浮かべやすいが，フィールドワーク中，当事者からの話を聞く機会はさまざまな場面で訪れる。もちろん，調査者と被調査者の双方にとっての限られた時間や質問内容を考慮して，面接調査を設定することは時には必要であるが，そうしたフォーマルなセッティングとは別に，前もって考えていた質問ではなく，シチュエーションに応じて必要な情報を尋ねることはよくある。

すでに述べたように，エスノグラフィーのためのフィールドワークでは，調査地の社会関係に参加することも必要であり，インフォーマルな場面で言葉を交わす機会も多い。調査テーマにとって必要な情報とは何か，それはいつ，どのような場面で誰に質問するのが適切か，などを常に意識すべきである。言いかえれば，インフォーマルな場面で観察したことや質問への答え，面接調査での質問に対する答えの中から，新たな「意味のある問い」を発見していくことが重要だと言える。

インフォーマル・インタビューでは，その内容をその場でレコーダーやメモなどに残すことはせずに，後で忘れないうちにメモを取っておき，さらにそのメモを参考にしながら，記憶が鮮明なうちにその時の状況と答え方などの情報も含めてフィールドノートに記録しておく。ただ，時には

調査モードをオフとし，調査地域の人たちとの親交を深めることも必要である。酒の席で重要と思われる情報を得ることはよくあることだが，なんとかメモに記録したものの，翌日になって，なぜその情報を重要と考えたのかがわからなくなってしまっていることも時にはある。

エスノグラフィー調査の特徴の一つは，調査地で得た新たなデータから調査の焦点を絞っていき，仮説を組み立て，その検証に必要となるデータを収集するのに，誰に，どのような設定でインタビューをしたらよいかを調査中に常に考えることである。そのためには，インフォーマルおよびフォーマルなインタビューで得た情報をこまめにメモし，そのメモをもとにして，その日のうちにフィールドノートをまとめる作業をすることである。フィールドノートは，データを得た状況や他のデータとの関係性，新たに発見した問い，仮説なども同じノートに記述しておいたほうが，後で読み返した時，とくにエスノグラフィーをまとめる際に役立つ。

収集したデータを総合し仮説を構成し，それを検証するための質問を練ることが質問の構造化であり，仮説検証の質問の場としては，調査者と被調査者の役割が明確なフォーマル・インタビューの設定が適切である。佐藤はフィールドワークにおけるさまざまなインタビューについて，簡潔な図に整理している（図2-1）。

面接調査あるいはフォーマル・インタビューについては，社会調査に関する多くの本にその方法が書かれているので，それらを参考にして欲しい。災害調査に限らず，フィールドワークとりわけエスノグラフィー調査では，インフォーマル・インタビューとフォーマル・インタビューの両方を，データ収集の進展に応じて適切に組み合わせていくことが必要である。

2.4 災害エスノグラフィー

「はじめに」で，災害研究におけるエスノグラフィーには二つの方向性があると指摘した。一つは，災害発生直後から復旧・復興期にかけての災害過程に焦点をあてたもので，災害の現場に居合わせた被災者や災害対応者に直接インタビューし，彼らの視点から災害像を描くものである。日本では阪神淡路大震災に関する研究において，研究者個人の資質や能力への依存部分が大きいというエスノグラフィーの特質を乗り越えるため，インタビューとデータの体系化のための標準的手法の開発も試みられ（林・重川，1997；田中・林，1998；田中・林・重川・浦田・亀田，2000・2001），他の災害への応用も行われている（田中・重川；2002）。これらの研究は，調査対象者が語った内容を，現実に起きた出来事の断片的な体験の語りとして扱い，それらを集めて体系化することで災害過程の全体像を再構成しようとするものである。その一方で，調査対象者自身による体験の解釈やその解釈に基づく語りの内容や語り方は，災

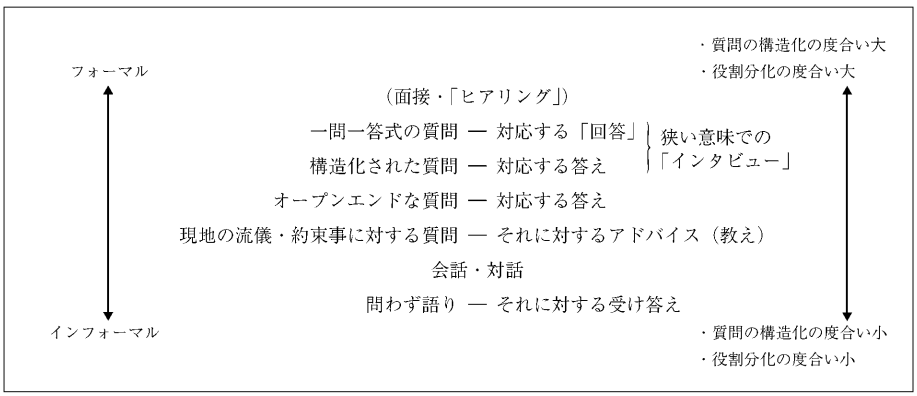

図2-1 様々なタイプのインタビュー（佐藤 2002）

害体験のみによって形づけられるものではなく，それまでの人生経験が大きく影響しているわけであり，語り手の人生経験というコンテクストに照らした，語りのテキスト分析の可能性が開けてくる事実を見逃してはならない。

もう一つの方向性として，体験者の視点に立ち，災害の様相を長期にわたり調査し，それを現出させた地域社会の特徴を，社会・経済・政治等における人間活動をとおして構築されたものとして，その総体を共時的のみならず通時的に解明しようとするエスノグラフィーも書かれている（Oliver-Smith 1986; Bolin, R. and L. Stanford 1998など）。例えば，エスニシティ・ジェンダー・宗教・年齢・貧富などの差異が，救援物資の配給や生活再建支援策の適用において何らかのファクターとして働いたかどうかの状況把握は，詳細な具体的データの収集を必要とする。こられのファクターが当該地域での災害に対する社会的脆弱性を構成する要素としていかに再生産されるかは，日常生活における人びとの活動にまで注目することが不可欠である。それは脆弱性の再生産や，そのプロセスの背景となる価値観や社会・経済・政治構造の同定，さらには対策を要する課題などを明確化することにも連なっている。

人類学や社会学がこれまで洗練させてきた，フィールドワークやエスノグラフィーの方法・課題・可能性についての議論を踏まえないと，単に現地に赴き，災害体験を直接聞き取り，それらを統合する研究者による別の語りを編集したものとしてのエスノグラフィーの量産にのみ向かってしまう危険性があることは留意すべきであろう。特定の被災地の災害プロセスに現れる特徴は，災害発生以前の社会・文化状況の反映であり，災害後の状況だけでは捉えきれない場合がほとんどである。エスノグラフィーは被災地の長期調査を必要とするが，災害後だけでなく，災害以前のその地域社会の歴史状況をも視野に収めることが不可欠である。

2.5 おわりに

質的調査は経験の蓄積，調査者の資質や能力に依存する部分が大きく，訓練プログラムを確立することは難しいと先に述べたが，「職人」と同様，エスノグラファーを育成することは可能である。そのためには，教科書や講義に加え，フィールドワークの実習が不可欠である。しかし，災害研究だからといって，被災地でいきなり実習というのでは，調査する側と受け入れる側の双方にとって戸惑いが大きすぎるであろう。そこで災害からすでに長い年月が経過している地域か，住民による自主防災活動が盛んな地域を選択し，その地域の住民理解を得たうえで，まずは住民自身が重要と考えている課題を発見し，フィールドワークを開始するのは，そう無理なことではないであろう。人類学や社会学では，調査実習がカリキュラムに組み込まれているケースが多い。災害をテーマとしたものでなくとも，そうした実習に参加することでも多くを学ぶことができる。

さらには，フィールドワークやエスノグラフィーを重視する人類学や社会学の研究者との共同研究や共同調査を通じて，エスノグラファーの育成・訓練プログラムの開発が求められる。もはや人類学はいわゆる「未開社会」を選定してフィールドワークをおこなう学問ではなく，開発途上国の一地域を調査地としていても，グローバリゼーションのなかで人びとが対峙している現実（リアリティ）を把握しようとしている。たとえば，国内でも開発プロジェクトの現場をフィールドとしたエスノグラフィーも出版され（小國，2003；石井，2007など），激動する現代世界に暮らす人びとが抱える問題に取り組んでいく実践人類学（anthropology in action）も生まれている。

自然災害の社会的影響やその様相を決定する社会的・歴史的要因の解明は，詳細な調査データの統合・分析によって可能となる。人類学から生まれたエスノグラフィーは，同じフィールド・サイエンスとしての災害・防災研究においても，高い利用価値を持つものと確信する。

参考文献

Bolin, Robert and Lois Stanford: The Northridge earthquake: vulnerability and disaster, Routledge,

1998.
エマーソン，R., R.フレッツ， L.ショウ（佐藤・好井・山田訳）：方法としてのフィールドノート，新曜社，1998.
マリノフスキー，B.（寺田和夫・増田義郎訳）：西太平洋の遠洋航海者，泉　靖一（編）世界の名著，59，中央公論社，1967.
林　春男・重川希志依：災害エスノグラフィーから災害エスノロジーへ，地域安全学会論文報告集，No. 7，pp. 376-379，1997.
石井洋子：開発フロンティアの民族誌―東アフリカ・灌漑計画のなかに生きる人びと，御茶の水書房，2007.
間淵領吾：社会調査の諸類型(3)：調査法とデータ分析法の種類による分類―量的調査と質的調査―，http://www.k3.dion.ne.jp/%7Emabuchi/lectures/soc_res_meth06.htm，2008年９月12日
小國和子：村落開発支援は誰のためか―インドネシアの参加型開発協力に見る理論と実践，明石書店，2003.
Oliver-Smith, Anthony: The martyred city: death and rebirth in the Peruvian Andes, University of New Mexico Press, 1986.
桜井　厚：インタビューの社会学―ライフストーリーの聞き方，せりか書店，2002.
佐藤郁哉：フィールドワークの技法―問いを育てる，仮説をきたえる，新曜社，2002.
佐藤郁哉：質的データ分析法―原理・方法・実践，新曜社，2008.
田中　聡・林　春男：災害人類学の構築に向けての試み―災害民族誌の試作とその体系化―，地域安全学会論文報告集，No. 8，pp. 14-19，1998.
田中　聡・林　春男・重川希志依・浦田康幸・亀田弘行：災害エスノグラフィーの標準化手法の開発―インタビュー・ケースの編集・コード化・災害過程の同定―，地域安全学会論文集，No. 2，pp. 267-276，2000.
田中　聡・林　春男・重川希志依・浦田康幸・亀田弘行：災害エスノグラフィーをもちいた災害過程における共通構造に関する考察，地域安全学会論文集，No. 3，pp. 181-188，2001.
田中　聡・重川希志依：災害エスノグラフィーをもちいた2001年９月11日ニューヨーク世界貿易センタービル災害における災害過程の分析，地域安全学会論文集，No. 4，pp. 1-10，2002.